

☆連載コラム「つたえること・つたわるもの」No.158で割愛した後半部分

日本の巨大倉庫で働く「日雇い（スポット）派遣」と関連のある、いくつかのトピックを見てみよう。たとえば、私が働いたロジクティクスセンターの床は堅いコンクリートである。少しクッション性のあるひも付きスニーカーを履いていても、8時間の立ち仕事は高齢労働者の足腰にかなりこたえる。それでも、だんだん立ち仕事に慣れてくれば、高齢者の足腰を強化する8時間トレーニング法になるかもしれない。

また、私のケースは派遣元（人材派遣会社）から紹介された日雇いスタッフだが、そのほかにも複数の派遣元からの日雇いスタッフ、派遣先のロジクティクスセンターが直接募集した日雇いスタッフがいる。これはあくまでも私見だが、まず派遣先が募集した日雇いスタッフの就労シフトが基本としてあり、それで不足しそうな人数分を複数の派遣元にノルマ（必要派遣数）として割り当てているのかもしれない。たとえば、私が就労希望を登録していなかった日の前日、派遣元から「明日ですが、〇〇の仕事を受けられますか？」と電話が入り、「予定があり受けられません」と答えたが、これは派遣元に要請されたノルマの調整作業ではなかったか。

アマゾン（※雇い主であるアマゾン・ドット・コム）がノマドを採用するのは、同社のキャンパーフォース・プログラム（※季節労働者を雇うために作ったシステム）の一環だ。キャンパスフォースは繁忙期限定のノマドによる労働チームで、フルフィルメント・センター（※ネットショップやカタログ通販における商品注文受付から発送までの物流センター）と呼ばれる倉庫のいくつかで働いている。アマゾンは従来型の派遣社員も何千人と採用しているが、配送料が劇的に増える繁忙期、つまり三、四か月続くクリスマスセールの間は、ノマドを追加投入する。（中略）勤務はシフト制で、最低でも一〇時間は通して働く。その間ずっと、コンクリートの固い床の上を歩き回り、屈んだりしゃがんだり背伸びしたり階段を上ったりしながら、商品のバーコードをスキャンし、商品を仕分けし、箱詰めする。一回の勤務で二四キロ以上歩く人もいる。だが繁忙期が終れば、キャンパーフォースは用済みになり、雇用契約は打ち切られる。お役御免になったノマドは、マネージャーが明るく言うところの「テールライトの行列（※キャンピングカーの移動時に点灯するテールランプ）をつくって去っていく。

（『ノマド 漂流する高齢労働者たち』第3章「アメリカを生きのびる」73～74ページ）

二〇一三年の繁忙期が始まる前に、アマゾンは就業予定者に最新のオンラインのニュースレターを送付していた。六月号のトップページには「キャンパーフォースで培う友情の価値」とある。求人用のリーフレットと同じ明るい調子のせいで、厳しい肉体労働がまるでサマーキャンプか何かのようだ。（中略）この記事は三月号の記事と比べると対照的だ。「二〇一三年の歴史的偉業達成へ！」と題する三月号の記事には、準備運動の勧めと、老化にともなう問題への対処法が書かれている。

アマゾンの繁忙期を上手に乗り切るには、肉体的・精神的準備が欠かせません。とくに開始前の肉体的準備がいかに重要かは、どんなに強調してもしきれません。運動の習慣のない人は、かかりつけのお医者さんと相談のうえ、運動を始めてください。お金のかからないお勧めの方法は、外に出て歩くこと。ウォーキングはお金もかからず、間接への負担も少ない、とても効果的なエクササイズです。始める前に、ストレッチングで

筋肉のウォーミングアップをしましょう。専門家によると、老化とともに体内のコラーゲンの構造が変化するため、関節の柔軟性が低下し、可動域が狭まるそうです。

(『ノマド 漂流する高齢労働者たち』第5章「アマゾン・タウン」140～141 ページ)

しかし、そんな明るいプレゼンフレーズとは裏腹に、2011 年以來、アマゾンにおける倉庫労働者の扱いは何度も新聞沙汰になっている。たとえば、2011 年は、ペンシルベニア州アレントアウンのローカル紙『ザ・モーニング・コール』が、アマゾン倉庫のブラック企業ぶりをすっぱ抜いた年であった。一つは、倉庫内の温度と搬出口のドア問題。ペンシルベニア州ブレインズビルのアマゾン倉庫は、夏には室温が 37℃を超えるが、盗難を恐れるアマゾン側は搬出口のドアを開放しようとしなない。そのかわり、倉庫の外に救急車を待機させ、労働者が熱中症になったらすぐに運び出せるよう準備していたという。もう一つは、時間あたりの目標値を際限なく増やされ、常にストレスにさらされるという、とても厄介な問題である。

“プレッシャーによる生産性向上、”と呼ばれる戦略だ。アマゾンは移動するにも商品を扱うにも従業員が常に持ち歩くハンディスキャナーからデータを収集し、分析することで生産性をリアルタイムに監視している。カンザス州コフィービルの倉庫でピッカーの仕事をしたキャンパーフォースの一人、ローラ・グレアムによれば、新たな商品をピックアップしてスキャンするたびに、スキャナーに次のピックアップまでの持ち時間が表示され、カウントダウンが始まる。持ち時間が徐々に縮まるので、まるで次々にレベルが上がるテレビゲームのようだ。スキャナーの画面には、時間あたりの目標をどれだけクリアしたかという進捗状況も表示される。うっかりまちがった列に行ってしまう、五分以上の遅れが生じると、監督が叱責にくる。

(『ノマド 漂流する高齢労働者たち』第5章「アマゾン・タウン」142 ページ)

私たちは「在庫管理品質保証部」で働くためのトレーニングを受けた。仕事は大して難しくはなさそうだった。デジタルの在庫記録と一致するよう、商品をスキャンするのだという。だがすぐに、私たちの倉庫（教育係によればアマゾン倉庫の中でも最大で、サッカー場一九個分の広さがある）には危険がいっぱいということが判明した。倉庫内には三五キロ以上にわたってコンベヤーベルトが張り巡らされ、その上を箱が右へ左へと流れている。ベルトは貨物列車のようにやかましいが、すぐに不具合で止まってしまう。コンベヤーのローラーに巻き込まれるといけないので、髪はアップにしてピンで留めておくこと、腰にシャツを結ばないことという指示があった。首から ID カードをさげるストラップは、強く引っ張ると外れる窒息防止の安全装置つきだった。

(『ノマド 漂流する高齢労働者たち』第9章「ビーツフルな体験——ブラック企業潜入レポート」268 ページ)

「暮し (ライフ)」という名の「精神文化」をより快適にしようと、「AI (人工知能)」という名の「物質文明」を頼りにする人類の近未来に、「希望 (ホープ)」という名の「幸せの青い鳥 (ブルーバード)」は羽ばたくのだろうか。